

平成23年度全国油症治療研究班会議より〔その2〕

【一般成人を対象とした健康実態調査とカネミ油症患者実態調査との比較に関する研究】

奈良県立医科大学 健康政策医学講座
赤羽 学

カネミ油症患者の健康実態を調査する目的で、平成20年度にアンケート調査が実施されています。しかし、油症被害発生から既に40年以上が経過しているため、調査結果の中にも加齢現象による症状が含まれていると考えられます。そこで油症患者の健康実態を明らかにするために、一般成人を対照に同様の調査を行い比較しました。その結果、一般成人に比べ油症患者で、診断基準に含まれる症状（色素沈着や慢性気管支炎、手足のしびれ等）およびこれまでの研究でPeCDF、PCB、PCQ濃度との関連が強いとされた症状の多く（多汗症や糖尿病等）が高頻度にみられました。これまであまり注目されてこなかった症状（味覚障害、体がつる・むくむ、脱毛などなど）でも差がありましたが、今回の研究は調査方法・対象・時期の異なるアンケート結果を比較しているため、ここで得られた差が油症による健康被害であるとそのまま断定することは難しいと考えられます。今後各分野の専門家による詳細な検討を行っていく上で、今回の研究結果は重要な資料になると考えられます。

【油症患者における母体血中ダイオキシン類濃度と出生体重との関連】

福岡市立こども病院・産科
月森清巳

カネミ油症がこどもの健康に及ぼす影響を調査する目的で、カネミ油症患者における出産時のダイオキシン類血中推定濃度と児の出生体重との関連について検討しました。その結果、出産時の母体血中PCDDsおよびPCDFs推定濃度は出生体重と負の相関を示し、なかでもPCDDsが最も出生体重の減少に影響を及ぼしていました。さらに、このダイオキシン類による出生体重への影響は男児のみに認められました。これらの成績から、妊娠中における高濃度のダイオキシン類曝露では胎児発育を抑制すること、この胎児発育に及ぼす影響には性差があることが考えられます。今後ダイオキシン類による胎児発育を抑制する機序を検討するとともに、カネミ油症患者、特に血中濃度の高い母親から1968年以降に出生した児では、その健康状態を注意深く見守ることが重要であると考えられます。

【ダイオキシン類が胎児・新生児と育児母に及ぼす影響およびその機構】

九州大学大学院薬学研究院分子衛生薬学専攻分野
山田英之

ダイオキシン類が子供の成長や成熟に及ぼす影響を、ラットを用いた動物実験によって解析しました。その結果、妊娠ラットにダイオキシンを与えると、母では育児行動や乳汁分泌に必要なホルモンであるプロラクチンの減少、胎児では成長に必要な成長ホルモンの減少が認められました。これらのホルモンの減少によって児は順調には生育できない可能性があります。また、ダイオキシン類を妊娠ラットへ投与すると、成長後の性未成熟（精子数減少や交尾能力減退）が起こり得ることが知られています。今回の研究で、この障害が胎児期や出生直後にかけての胎児・脳下垂体ホルモン分泌抑制に起因することが明らかになりました。化学物質の障害性の有無や程度は動物種で異なることも多いので、上記の成績がただちにヒトにも当てはまるか否かは不明です。しかし、ヒト妊娠母がダイオキシン類に曝露されると、児にラットと同様な障害が発生する可能性は否定できません。

お知らせ

—油症リーフレットについて—

「油症の現況と治療の手引き2011」

このたび、患者さまと医療機関向けに油症の現況と治療についてのリーフレット（改訂版）を作成いたしました。リーフレットには、ダイオキシン類の健康被害を少しでも抑えるために、「**生活の指針**」も掲載いたしました。皆様方の日頃の生活のお役にたてれば幸いです。

リーフレットは、担当自治体より送付されることになっております。必要に応じて、かかりつけの先生等にお渡しください。

ご相談事やリーフレットがさらに必要な場合は、九州大学病院油症ダイオキシン研究診療センター
TEL 092-642-5211、FAX 092-642-5201
までご連絡ください。

問い合わせ先：全国油症治療研究班 班長 古江 増隆（ふるえ ますたか）
〒812-8582 福岡市東区馬出3-1-1 九州大学医学部皮膚科教室
TEL 092-642-5582/FAX 092-642-5600